

ウイル・オ・ウイスプ

外国語学部 英語英文学科 3年 藤間 柏

幽靈がいる。

あばら骨で守られた臓器の奥に ひつそりと削られたクレーター
ずっと昔から そこに幽靈がいるんだ。

クライン。クライン。

埃まみれの天井の下で 彼らはいつまでも泣いている

太陽のない 都会の片隅

百年続いた 亡靈の嘆きを

叫べ、叫べ。

溜まった内圧で 破裂する前に

スピッタ。スピッタ。

大気に漂う彼らの遺物まで 肺が吸い込んでむせ返る

コンクリート建て 墓標の内側で

呑み込んだ言葉が 器官を狭めた

吐き出せ、吐き出せ。

隠してばかりじゃ 窒息してしまう

エスケープ。エスケープ。

いつか隠したどこかの孔から 熱い液体が漏れ出した

ようやく脈打つ 心臓の軋みで

過去の亡靈に ラッパの音色を
逃げ出せ、逃げ出せ。

まだ僕たちは 生きているのだから

まだ僕たちも、ここにいるのだから。

街を歩いていると、よく死んだような顔をして歩く人たちを目にします。空虚な瞳で、ふらふらと弱った足取りで歩く人たち。その様子は、まるで「悪靈に取りつかれた」かのようだ。

また、夜の道を一人で歩いていると、急に寂しくなる時があります。胸のあたりにあらはすの何かが欠けて落ちてしまつた感覚がして、ただ何もない空間があるのは目に見えないガスが広がっていく感じ。そんなときには、僕は「幽靈」を連想してしまいます。本当は、誰しもが飼っているのではないでしようか。この、自分のどこかから生まれてきた冷たい存在を。

・作者より